PA-14

文接続の類型論[1]
－等位接続と副詞節の間に潜む一般性の解明を目指して－

水野庄吾（ポツダム大学・京都大学博士課程）
efforts.0213@gmail.com

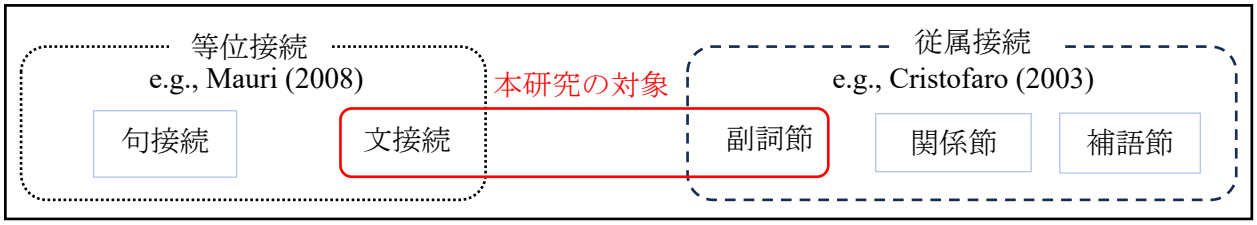
「要旨」

本発表では，文接続を意味の観点から通言語的に考察することで，文接続に用いられる手段の種類を特定し，これに関する 3 つの一般性を報告する。所謂，等位接続と副詞節は通言語的には形式的基準で区別することができず，連続性をなすものとして知られている。それにも関わらず，先行研究はこれらをどのように区別するかという議論に終始しており，これらを連続的に捉え，その形態統語的な振る舞いに着目した通言語的研究は見当たらない。そこで本研究では等位，副詞節といった区別をせず，文接続によって典型的に表される 10 個の意味関係を基準にそれらに用いられる手段に着目することで，世界の言語において順接は他の意味関係に比べ，単純な手段で表される強い傾向があるということを示す。さらに，これは順接が表す意味が他の意味関係より潜在的に広く，その結果，使用頻度が高くなることから，form-frequency correspondence explanation によって説明ができるという仮説を提示する。

1. はじめに

本発表の目的は，文接続 (clause-linking) を意味の観点から通言語的に考察することで，文接続に用いられる手段の種類を特定し，これらに関して一般性を明らかにすることである。一般的に文接続は，等位接続と従属接続に下位分類される。更に等位接続は句や語を接続する句接続と文や節を接続する文接続，従属接続はその機能的な違いから関係節 (relative clause)，補語節 (complement clause)，副詞節 (adverbial clause) と区別される（以下，表 1 を参照）。しかし，これらの中のいわゆる等位の文接続と副詞節は，形式的に区別をつけることができない言語もあり，通言語的に区別することは難しく，連続体をなすものとされている (e.g., Mauri 2008: ch.1.3; Diessel 2001)[2]。つまり等位接続と副詞節を区別する通言語的に妥当な形式的基準は現状，得られていない。それにも関わらず，先行研究はこれらをどのように区別するかという議論に終始しており，これらを連続的に捉え，その形態統語的な表れを通言語的に考察した研究は見当たらない (e.g., Foley 2010; Toosarvandani 2016)。

表 1: 接続の種類と本研究の対象



2. 等位接続と従属接続の区別と本研究の対象

等位接続と従属接続の区別に関しては，先行研究では主に 2 種類のアプローチが採られてき

---

[1] 本研究を行うに際してご指導いただいた Martin Haspelmath，有益なコメントをいただいた以下の方々に謝辞を示したい: 上野瞭太，鈴木唯，中本舜，長屋尚典，吉田樹生（敬称略）。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。また，本研究は，一部 JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。

[2] 本研究はいわゆる等位の文接続と副詞節のみを対象とする。以下で，文接続という用語を用いる際はこの 2 つのみを指すものとする。

た。本節ではそれぞれについて概観したのち，本研究の方針について述べる。

等位接続と従属接続に関して，最もよく知られた区別は従属性 (dependency) や埋め込み (embedding) などの形式的なものである(Green 1976; Van Valin & LaPolla 1997: ch.8 など)。しかし，前節で述べた通り，等位の文接続と副詞節は形式的な基準では通言語的に区別することができない[3]。

そこで先行研究では，語用論的な基準で，これらを区別することも提案されている (Wierzbicka 1980 など)。Croft (2001: ch.9; 2022: ch.15.1) は，Talmy (1978; 2000: ch.5-6) や Reinhart (1984) に基づき，副詞節は figure-ground を形成するのに対し，等位接続は complex figure を形成すると主張している。例えば，以下の (1a) では，夢を見るという行為は寝るという行為に依存しており，寝るという行為は夢を見るという行為の ground になっているのに対し，(1b) では，両節が対等の関係である。

(1) a. He dreamed while he slept.
b. The sun was shining and the birds were singing.
c. He slept and he dreamed.

確かにこのような語用論的な観点は，等位の文接続と副詞節を区別する上で，通言語的に有効な唯一の区別であるように思われる。しかし，これは以下の 2 点の理由から形態統語類型論を行う上での基準としては適していない。まず，この語用論的区別は抽象的で，これを判断するためには正確な文脈などの情報が用意されている必要がある。しかしながら，通常，参照文法などではそのような情報は得られない上に，話者などの個人でのヴァリエーションが多い（この点については Haspelmath [2017] を参照されたい)。さらに，このような語用論的な特性は，形態統語的な区別に一致しない。(1a) は (1c) のように，ほぼ同内容を所謂，等位接続で言い換えることは可能である。(1c) を figure-ground と見なすか，complex figure と見なすかは意味に依存的であると考えられる。また以下の (2) のように同じ形式が文脈次第で所謂，等位接続とも副詞節とも解釈され得る言語もある。

(2) Malakmalak (Birk 1976: 122)[4]

[*yinʸa*	*tat*	*ayanö]*	*[alawar*	*tatʸma*	*yitaŋayi]*
man	see	I	woman	hit.CONT	3SG.M.SBJ.2.PRS/PST.3SG.F.OBJ

(i) ‘When I saw the man he was hitting his wife.’
(ii) ‘I saw man who was hitting his wife.’
(iii) ‘I saw man and he was hitting his wife.’

つまり，形式的区別，語用論的区別は共に形態統語類型論を行う上では，有効とは言えない。さらに，等位接続と副詞節は連続体をなす以上，そもそも区別する必要があるのかという疑問が湧く。事実，等位接続と副詞節を明確に区別せず，それぞれを考察する上で有効となるパラメーターを示した研究 (e.g., Lehmann 1988; Haiman & Thompson 1984) や文接続を構成する変数を基に，副詞節のプロトタイプを示した研究も存在する(Bickel 2010)。そこで本研究では，等位の文接続と副詞節を区別することなく，それらが表すことができる典型的な意味を比較の基準，すなわち comparative concept (Haspelmath 2007b; Haspelmath 2010) として定義することで，世界の言語でそれらを表すために使用される手段を特定し，それに関する一般性を探る。接続された文が表す意味関係は理論上，全ての言語に存在するものである上に，通言語的に特定することが可能であり，comparative concept に最も適したものだと考えられる。

---

[3] 具体的には，Cristofaro (2003: ch.2); Haspelmath (2004: ch.11; 2007a: ch.7) を参照されたい。

[4] 本稿で使用するグロスは，Leipzig Glossing Rules に基づいている。それ以外のものは，以下の通りである: CONT: continuative, DRK: deranked (deranking)。また，本稿では，例文のグロスを引用後，改変する場合がある。用例に関しては，紙面の都合上，必要最低限しか挙げることができない。本研究のデータは CrossGram (Haspelmath, ed.)で公開予定である。より具体的なデータは CrossGram (https://crossgram.clld.org/) を参照されたい。

3. 文接続が表す典型的な意味関係

接続された文が表す意味関係として，本研究では，以下の 10 個を考察対象とする: (1) 順接 (2) 対比 (3) 逆接 (4) 選言 (5) 時間的重複 (6) 時間的先行 (7) 時間的後行 (8) 理由 (9) 条件 (10) 目的。当然，これら以外にも文接続で表される意味関係はあるが，これらは言語類型論の先行研究で伝統的に扱われてきたものである (Mauri [2008]; Cristofaro [2003] 参照)。紙面の都合上，それぞれの意味関係については詳説しないが，順接に関してはその定義について触れておきたい。順接は英語の *and* や他の言語でこれに相当するものを示すが，これは 2 つの節を繋ぐだけで，デフォルトの意味を示さないものであることが知られている (Mauri 2008: ch.3.1; Dik 1968: 271)。従って，文脈次第で前後関係，因果関係，目的関係など様々な解釈が可能なものを本研究では，順接として扱っている。

4. 文を接続するために用いられる手段 (Strategy)

世界の言語で文接続に用いられる手段は主に以下の 3 つである: (i) 無標示接続; (ii) 連結詞接続 (iii) 非等価接続。本節ではそれぞれについて詳説する。

(i) 無標示接続 (juxtaposition, parataxis, asyndetic)

無標示接続とは，以下の (3) のように，2 つ以上の文をお互いの関係性を示す要素を用いずに接続する手段である。

(3) Ulwa (Barlow 2023: 358)
[Nï *mbï-wap]* *[ma=kot-p.]*
[1SG here-be.PST] [3SG.OBJ=break-PFV]
'I stayed here and (I) bore her.'

(ii) 連結詞接続 (connective)

連結詞接続とは，接続詞や側置詞，助詞などの文を接続するための要素（連結詞）が存在する手段である[5]。

(4) Baba Malay (Lee 2022: 207)
Lepas *maka* *pagi* *bahru, dia* *pi* *kreja.*
after eat morning just 3SG go work
'After just eating breakfast, she goes to work.

(iii) 非等価接続 (deranking, downgrading)

非等価接続とは，文を接続することによって，通常の独立した叙述文とは異なる形式を用いる手段である(Stassen 1985: 78; Croft 2022: ch.15.2.3 参照)。(5) のように通常，この手段は述語の形式として現れる(Croft 2022: 478)。

(5) Chukchi (Dunn 1999: 244)
ləɣen *ʔire-plətku-**neŋu*** *ɣ-ekwet-lin* *jara-ɣtə*
really race-finish-DRK PRF-leave-3SG home-all
'Since [he] finished racing he set off homewards.'

しかし本研究では，以下の (6) のように述語以外の要素が文接続によって通常の独立した叙述文

[5] ここで連結詞と呼ぶのは，接続詞や側置詞などの個別言語に属する品詞を通言語的に捉えるためである。

と異なる形式になる場合も非等価接続として認定する。Yaqui 語では，文接続によって主語の格標示が通常の主格ではなくなる。

(6) Yaqui (Lindenfeld 1973: 81)

hu-**ka**	oʔoo-**ta**	yepsa-k-**o**	itepo	saha-k
this-DRK	man-DRK	arrive-PRF-when	we	go-PRF

'When the man arrived we left.'

具体的な議論に入る前に，これらについて 2 点コメントをしておきたい。まず，多くの言語がある意味関係を表すために複数の手段を用いるということである。例えば，Marathi 語は，順接として無標示接続を用いる場合と連結詞接続を用いる場合がある。

(7) Marathi (Pandharipande 1997: 159)

a.

Mītā	*gharī*	*gelī*	*mī*	*badzārāt*	*gelo.*
Metta	home.LOC	go.PST.3SG.F	I	market.LOC	go.PST.3SG.M

'Meeta went home and I went to the market.

b.

Mohan	*gāto*	***āṇi/wa***	*madhū*	*peṭī*	*wādzawto.*
Mohan	sing.PRS.3SG.M	**and**	Madhu	harmonium	play.PRS.3SG.M

'Mohan sings and Madhu plays the harmonium.'

また，連結詞は非等価性には直接的に関与しない。つまり，連結詞による接続には，等価文 (balanced clause) のみを接続するものと非等価文 (deranked clause) が関与するものがある。後者の例としては上記の (6) や以下の (8) がある。連結詞接続と非等価接続の両方を用いるものを本研究では (iv) 複合接続と名付けることにする[6]。

(8) Turkish (Kornfilt 1997: 67)

Margaret	*Thatcher*	*istifa*
Margaret	Thatcher	resignation

*et-**tiğ**-i*	***için***	*üzül-dü-k.*
do-DRK-3SG	because	sadden-PST-1PL

'We were saddened because Margaret Thatcher stepped down.'

5. 一般化とその説明

本節では，文接続の意味関係とそれを表すための手段との間に通言語的に確認される 3 つの一般性を報告する。さらにこれら一般性を説明するものは何かという疑問に対する仮説を提示する。

5.1. 文接続に関する一般化

本研究では，文接続に関して以下の 3 つの一般性を確認した。一般性 2 と一般性 3 は一般性 1 の代表的なものである。

一般性 1: 世界の諸言語において，順接は他の意味関係と比べ単純な（もしくは同等の）手段を用いるという強い傾向がある。

[6] 本研究では，連結詞が他の要素に標示を要求する場合（e.g., when sleeping の ing）も複合接続と認定している。連結詞は必ずしも非等価接続を要求するものではない以上，そのような標示（本研究では非等価接続と認定される）を要求する場合は，複合接続と認定するのが妥当であると現時点では考えられる。

ここでの単純な手段が何を意味するかについては言及する必要がある。確かに (i)~(iv) の手段の複雑性を客観的に測ることは難しい。しかし，形態的には (i) 無標示接続が最も単純，他方，(iv) 複合接続が最も複雑であることは説明する必要がないだろう[7]。従って，一般性 1 はより具体的に以下の 2 つの一般性を含意する。

一般性 2: 世界の諸言語において，順接以外の意味関係で (i) 無標示接続を用いる言語は，これを順接でも用いることができるという強い傾向を示す[8]。

一般性 3: 世界の諸言語において，順接で (iv) 複合接続を用いる言語は，他のいずれかの意味関係でもこれを用いるという強い傾向を示す。

これらを端的に表す言語は，以下の表 2 の通りである。

表 2: 代表的な言語データ

	Gooniyadi	Rapanui	Paumari	Turkish	Bunan	Yaqui
主出典	McGregor (1990)	Kieviet (2017)	Chapman & Derbyshire (1991)	Kornfilt (1997)	Widmer (2017)	Lindenfeld (1973)
順接	**(i)**	**(i)**/(ii)	**(i)**	**(i)**/(ii)/**(iv)**	(ii)	**(i)**/(ii)
対比	**(i)**	–	(ii)	**(i)**/(ii)	–	(ii)
逆接	**(i)**/(ii)	**(i)?**/(ii)/**(iv)**	**(i)?**/(ii)/**(iv)**	(ii)	(ii)	(ii)/**(iv)**
選言	–	(ii)	**(i)**	(ii)	(ii)	(ii)
重複	(iii)	**(i)**/(ii)	(ii)/(iii)/**(iv)**	**(iv)**	**(iv)/(iv)**	(ii)/(iii)/**(iv)**
先行	(ii)	**(i)**	(ii)/**(iv)**	**(iv)**	**(iv)**	–
後行	(ii)	(ii)/**(iv)**	**(iv)**	**(iv)**	–	–
理由	–	(ii)/(iii)/**(iv)**	(iii)/**(iv)**	**(iv)**	**(iv)**	(ii)
条件	(iii)	**(i)**/(ii)	**(i)**	**(iv)**	**(iv)**	(ii)/(iii)/**(iv)**
目的	**(i)**	(iii)/**(iv)**	(iii)/**(iv)**	**(iv)**	–	(ii)/**(iv)**

5.2. なぜこのような一般性を示すのか

順接のみが他の意味関係よりも単純な手段で表されることはなぜかという疑問に関しては，form-frequency correspondence explanation (Haspelmath 2021) が有効であると考えられる。これは，意味的に対をなす文法範疇で使用頻度に差があるものは，使用頻度の高いものが相対的に短い（もしくはゼロ）の形式，使用頻度の低いものが相対的に長い形式と結び付く傾向にあるというものである。本研究は，確かにこれが想定するような形式のコーディングを対象としたものではなく，あくまで手段（strategy）レベルの分析を行なったものである。しかし，複雑さを予測するという点においては，共通するものである上に，これらを別物であると考える理由は特に見当たらない。事実，順接は 3 節で確認したように，デフォルトの意味を持たない。その点において，他の意味関係とは大きく異なる。他の意味関係は理由や条件など，特定の意味でのみ使用される

[7] 確かに (iii) の非等価接続には，述語の TAME 標示を失うものなどがあり，その点において形態的にはそのような手段の方が単純であるとも考えることができるかもしれない。しかし，文接続を示すための標示を必要としない (i) の無標示接続は，通常の独立した叙述文と形態的に差異がないという観点から本研究では，無標示接続の方がより単純な手段であると考えている。

[8] 順接に (i) の無標示接続を用いる言語は，順接がその定義から他の意味関係も表し得るため，これが他の意味関係に現れるだけではないかという意見もあるかもしれない（例えば，Gooniyadi 語の目的）。確かにこのように考えることは可能であるかもしれないが，そうだとしても本研究で提案する一般性とは矛盾するものではない。

にも関わらず，順接は文脈次第で他の特定の意味関係をカバーすることができる。しかし，この逆は通常成り立たない。つまり，順接が表すことのできる意味関係の広さは，他の意味関係に比べ潜在的な使用頻度の高さをもたらし得る。そしてこの使用頻度の高さこそが本研究で提示した一般化，つまり順接を表す手段は他の意味関係を表す手段より単純であるということに繋がるということが本研究の仮説である。

Form-frequency correspondence explanation による説明がもたらす利点は，単に本研究で報告した 3 つの一般性を説明するだけでなく，文接続に関して他のいかなる一般性も確認できないという事実も説明可能であることである。順接以外の意味関係は順接とは違い，基本的には特定の意味でしか使われることはない。したがって，これらの間には潜在的な使用頻度の差異は認められない。これこそが上記した 3 つ以外に一般性が得られないことの理由であると考えられる[9]。

しかし，本研究では，このような文接続の手段と使用頻度との間の相関関係に関して客観的に調査をしたものではない。したがって，コーパスなどのより具体的なデータによる更なる分析が今後の研究課題として必要である。

6. 結論

本研究では，文接続を等位接続や副詞節（従属接続）という接続の種類を区別することなく，文接続が典型的に表す意味関係の観点から，通言語的に調査することで，それを表すために通言語的に用いられる手段は 3 種類あること，さらにそれらに関する 3 つの一般性が得られるということを報告した。また，これらの一般性は，form-frequency correspondence explanation によって説明が可能であるという仮説を提案した。順接は他の意味関係とは異なり，デフォルトの意味を持たず，表し得る意味関係が広い。順接が持つ潜在的な意味関係の広さは使用頻度の高さに繋がり，その結果，他の意味関係と比べ，単純な手段で表されるというものである。この説明の利点は，単に本研究で得られた 3 つの一般性を説明することが可能であるだけでなく，他の一般性が得られないという事実も説明可能であるということである。他の意味関係は基本的に特定の意味関係のみで使用され，潜在的な使用頻度の違いは想定できない。しかし，このような文接続の手段と使用頻度の相関関係は，コーパスなどの具体的なデータによる更なる分析が必要である。これは今後の課題として残されている。

参考文献

Barlow, Russell. 2023. *A grammar of Ulwa (Papua New Guinea)*. Berlin: Language Science Press.

Bickel, Balthasar. 2010. Capturing particulars and universals in clause linkage: a multivariate analysis. In Isabelle Bril (ed.), *Studies in Language Companion Series*, 51–102. Amsterdam: John Benjamins Publishing.

Birk, David. 1976. *The Malakmalak Language, Daly River (Western Arnhem Land)*. Vol. 45. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.

Chapman, Shirley & Desmond C. Derbyshire. 1991. Paumari. In Desmond C. Derbyshire & Geoffrey K. Pullum (eds.), *Handbook of Amazonian Languages 3*, 161–352. Berlin: Mouton de Gruyter.

Cristofaro, Sonia. 2003. *Subordination* (Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory). Oxford, New York: Oxford University Press.

Croft, William. 2001. *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Croft, William. 2022. *Morphosyntax: Constructions of the World's Languages*. Cambridge: Cambridge University Press. https://doi.org/10.1017/9781316145289.

Diessel, Holger. 2001. The Ordering Distribution of Main and Adverbial Clauses: A Typological Study. *Language* 77(3). 433–455.

[9] (ii) の連結詞接続に関しては，確かに多くの言語で，1 つの連結詞が複数の意味関係を表すことがある(例えば，時間的関係に関しては，Guerrero [2021]を参照)。しかし，これは順接のようにデフォルトの意味関係を持たないものではなく，あくまで coexpression (Haspelmath 2023)である。

Dik, S. C. 1968. *Coordination: its implications for the theory of general linguistics*. Amsterdam: North-Holland.
Dunn, Michael J. 1999. *A Grammar of Chukchi*. Canberra: Australian National University PhD dissertation.
Foley, William A. 2010. Clause linkage and nexus in Papuan languages. In Isabelle Brill (ed.), *Clause linking and clause hierarchy*, 27–50. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
Green, Georgia M. 1976. Main Clause Phenomena in Subordinate Clauses. *Language* 52(2). 382–397.
Guerrero, Lilián. 2021. When-clauses and temporal meanings across languages. *Folia Linguistica* 55(1). 35–74. https://doi.org/doi:10.1515/flin-2020-2070.
Haiman, John & Sandra A. Thompson. 1984. "Subordination" in Universal Grammar. *Proceedings of the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 510–523. https://doi.org/10.3765/bls.v10i0.1973.
Haspelmath, Martin. 2004. Coordinating constructions: An overview. In Martin Haspelmath (ed.), *Coordinating Constructions*, 3–39. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
Haspelmath, Martin. 2007a. Coordination. In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description*, vol. 2, 1–51. Cambridge: Cambridge University Press.
Haspelmath, Martin. 2007b. Pre-established categories don't exist: Consequences for language description and typology. *Linguistic Typology* 11(1). 119–132. https://doi.org/doi:10.1515/LINGTY.2007.011.
Haspelmath, Martin. 2010. Comparative concepts and descriptive categories in crosslinguistic studies. *Language* 86(3). 663–687.
Haspelmath, Martin. 2017. Explaining alienability contrasts in adpossessive constructions: Predictability vs. iconicity. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 36(2). 193–231. https://doi.org/doi:10.1515/zfs-2017-0009.
Haspelmath, Martin. 2021. Explaining grammatical coding asymmetries: Form–frequency correspondences and predictability. *Journal of Linguistics* 57(3). 605–633. https://doi.org/10.1017/S0022226720000535.
Haspelmath, Martin. 2023. Coexpression and synexpression patterns across languages: Comparative concepts and possible explanations. To appear in *Frontiers in Psychology*.
Kieviet, Paulus. 2017. *A grammar of Rapa Nui* (Studies in Diversity Linguistics). Berlin: Language Science Press.
Kornfilt, Jaklin. 1997. *Turkish* (Descriptive Grammars Series). London: Routledge.
Lee, Nala H. 2022. *A Grammar of Modern Baba Malay* (Mouton Grammar Library). Berlin: De Gruyter Mouton.
Lehmann, Christian. 1988. Towards a typology of clause linkage. In *J. Haiman & S. A. Thompson (Eds.), Clause combining in grammar and discourse*, 181–225. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
Lindenfeld, Jacqueline. 1973. *Yaqui Syntax* (University of California Publications in Linguistics). Vol. 76. Berkeley and Los Angeles: Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
Mauri, Caterina. 2008. *Coordination Relations in the Languages of Europe and Beyond*. Berlin: De Gruyter Mouton. https://doi.org/10.1515/9783110211498.
McGregor, William. 1990. *A Functional Grammar of Gooniyandi* (Studies in Language: Companion Series). Vol. 22. Amsterdam/Philadelphia: Amsterdam: John Benjamins.
Pandharipande, Rajeshwari V. 1997. *Marathi* (Descriptive Grammars Series). London & New York: Routledge.
Reinhart, Tanya. 1984. Principles of gestalt perception in the temporal organization of narrative texts. *Linguistics* 22(6). 779–810. https://doi.org/doi:10.1515/ling.1984.22.6.779.
Stassen, Leon. 1985. *Comparison and Universal Grammar*. Oxford: Basil Blackwell.
Talmy, Leonard. 1978. Figure and ground in complex sentences. In J.H. Greenberg, Charles A. Ferguson & E.A. Moravcsik (eds.), *Universals of human language*, vol. 4, 625–649. Stanford: Stanford University Press.
Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics: Concept structuring systems*. Vol. 1. Cambridge, MA and London: MIT press.
Toosarvandani, Maziar. 2016. The temporal interpretation of clause chaining in Northern Paiute. *Language* 92(4). 850–889.
Van Valin, Robert D. & Randy J. LaPolla. 1997. *Syntax: Structure, Meaning, and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.
Widmer, Manuel. 2017. *A grammar of Bunan* (Mouton Grammar Library). Berlin and New York: Berlin: Mouton.
Wierzbicka, Anna. 1980. *Lingua Mentalis: The Semantics of Natural Language*. New York: Academic Press.